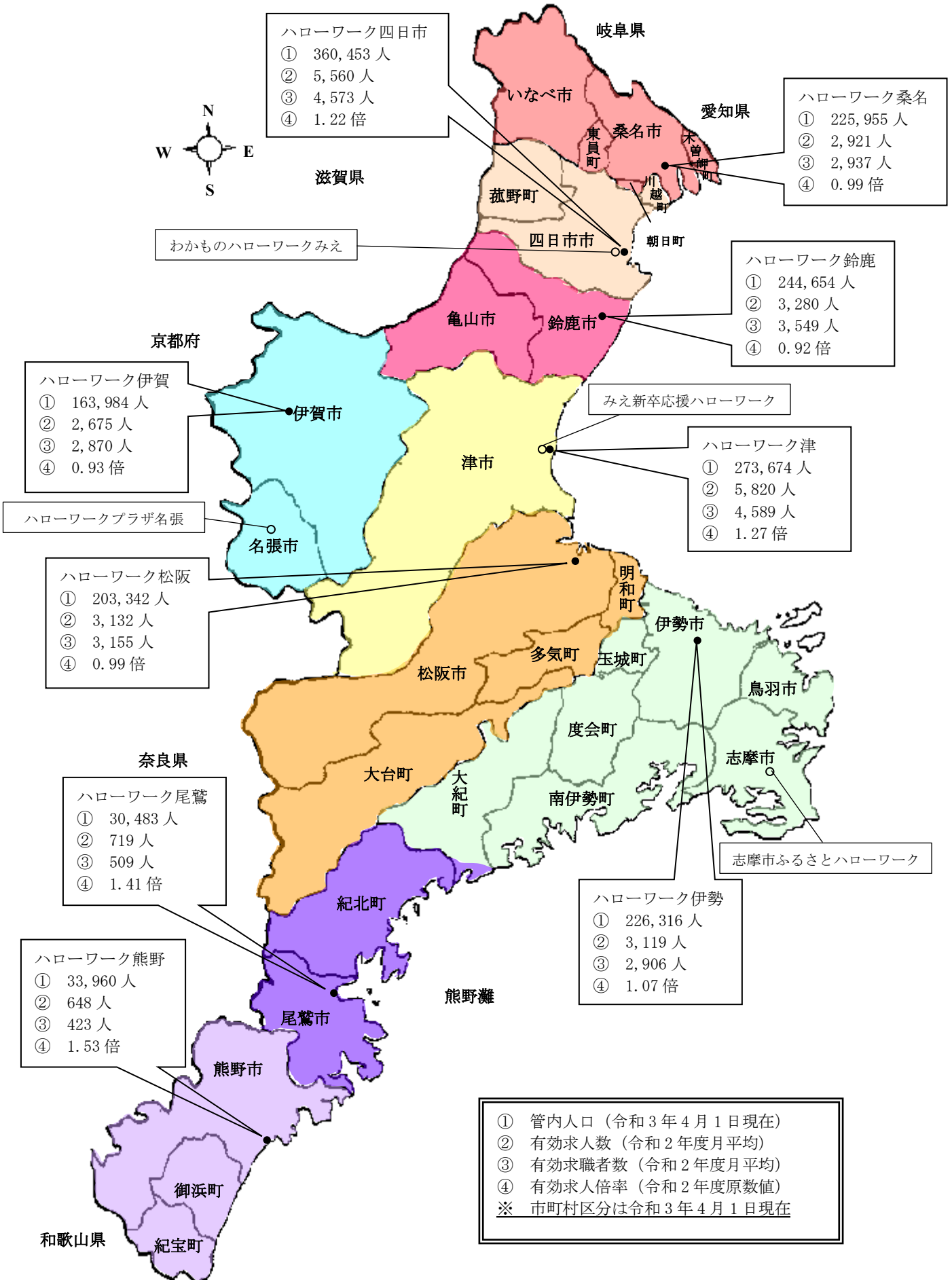


# 概 況



# I 公共職業安定所の所在地及び管轄区域



## II 公共職業安定所の管轄区域の概況

項目 安定所	所在地	管轄区域	市 町 数			管内面積 (k m <sup>2</sup> )	管内人口 (人)
			計	市	町		
桑 名	桑名市桑栄町 1-2 サンファーレ北館 1階	桑名市、いなべ市、 桑名郡、員弁郡、 三重郡のうち朝日 町	5	2	3	400.92	225,955
四 日 市	四日市市本町 3-95	四日市市、三重郡 (朝日町を除く)	3	1	2	322.26	360,453
鈴 鹿	鈴鹿市神戸 9-13-3	鈴鹿市、亀山市	2	2		385.50	244,654
津	津市島崎町 327-1	津市	1	1		711.19	273,674
松 阪	松阪市高町 493-6 松阪地方合同庁舎 1階	松阪市、多気郡	4	1	3	1,130.54	203,342
伊 勢	伊勢市岡本 1-1-17	伊勢市、鳥羽市、 志摩市、度会郡（大 紀町錦を除く）	7	3	4	1,145.74	226,316
伊 賀	伊賀市四十九町 3074-2	伊賀市、名張市	2	2		688.00	163,984
尾 鷲	尾鷲市林町 2-35	尾鷲市、北牟婁郡、 度会郡のうち大紀 町錦	2	1	1	449.24	30,483
熊 野	熊野市井戸町赤坂 739-3	熊野市、南牟婁郡	3	1	2	541.10	33,960
合		計	29	14	15	5,774.49	1,762,821

注. 管内面積及び管内人口は、令和3年4月1日現在の数値である。両項目の度会郡大紀町の数値は、同町錦と錦以外の数値区分が把握できないため、伊勢所管内の数値に計上している。管轄区域の市町村名は令和3年4月1日現在のものである。

安定所	摘 要
桑 名	<p>桑名市は、古くから伊勢の玄関に位置し東海道五十三次の要衝として栄えたところで、特産品の時雨蛤は全国的にも有名である。主な産業は地場産業である鉄鋼業（鋳物）、電気機械のほか、輸送用機械（自動車部品）を始め一般機械等の製造業が中心であり、管内には大型企業も進出している。産業拠点として桑名市では桑名ビジネスリサーチパークをはじめとする工業団地の開発、いなべ市では新名神高速道路とそれに繋がる東海環状自動車道の一部開通により、滋賀県・岐阜県に隣接した利点を活かした企業誘致が積極的に進められている。また、名古屋市のベッドタウンとしてもめざましい発展を遂げており、桑名市内には郊外型大規模店舗や大型娯楽施設もみられる。</p>
四 日 市	<p>四日市市は、地場産業の窯業（萬古焼）、漁網などのほか、石油化学を軸に一般機械、食料品、電気機械、輸送用機械等の製造業が産業の主体であり、内陸部の工業団地等へ加工組立型産業やハイテク産業、バイオ産業などの立地が進む一方、臨海部のコンビナートにおいては機能化学品などの高付加価値型製品の製造へ転換が図られ、多様な産業集積が進みつつある。地理的には近畿、中部圏を結ぶ東西幹線交通の要衝であり、四日市港を核とした臨海工業地帯として発展しており、四日市市では中核市移行の準備も進められるなど、本県経済の中核地域として発展している。</p>
鈴 鹿	<p>鈴鹿市は、古くから東西幹線交通の要衝で地理的条件に恵まれ、伝統産業の伊勢型紙、鈴鹿墨も有名である。輸送用機械、電気機械、化学工業、繊維等の進出が相次ぎ、自動車産業を中心に伊勢湾岸における工業地帯の拠点となっている。また、第1次産業では緑化樹木や茶等の県内有数の生産地帯でもある。宅地開発や郊外型大規模店舗の展開もあり市街地が拡大している。亀山市には、伝統的な町並みが保全された閑宿があるほか、地場産業としての蠟燭の生産のほか、三重県が進めるクリスタルパレー構想の中核工業団地であり、高速道路網に直結した産業団地の亀山・関テクノヒルズについても新たな分譲区画が完成するなど発展が期待されている。</p>
津	<p>津市は平成18年に10市町村が合併し県内最大の面積を有する自治体となった。伊勢平野のほぼ中心部にあり、かつては津藩の城下町として栄え、現在は県庁所在地として国の出先機関や民間の事業所、三重大学を始めとした高等教育機関が立地しており、本県の行政、教育、文化、経済等の中枢的な機能が集積している。産業面でも電気機械、輸送用機械、食料品、繊維製品等の製造業のほか、郊外型大規模店舗等の商業、銀行証券等の金融業などの第3次産業のウエイトの高い地域である。周辺地域に複数の工業団地も造成されているほか、産業・高次都市・居住の各種機能を有する新都市として、「中勢北部サイエンスシティ」の開発も進められている。</p>
松 阪	<p>松阪市は、松阪商人とよばれるように江戸時代から商いの町として知られており、国学者の本居宣長、北海道の名付け親である松浦武四郎の生誕地や松阪牛の生産地としてもよく知られている。主な産業は窯業（硝子）、電気機械、食料品、木材・木製品等の製造業のほか、商業を中心とした第3次産業のウエイトの高い地域である。また、平成28年度には松阪中核工業団地へ航空機産業企業が、平成29年度には嬉野天花寺工業団地へ日本初進出となる外資系自動車産業企業が進出したほか、令和3年には多気町に「癒・食・知」を備えた新しいリゾート施設が開業し、地域の観光事業の発展が期待されている。</p>
伊 勢	<p>伊勢市、鳥羽市、志摩市は、美しい自然と歴史的な文化遺産に恵まれ、管内の約7割が伊勢志摩国立公園となるなど国際的な観光地域となっており、国際リゾート「三重サンベルトゾーン」の重点地域として、リゾート施設が整備されている。産業は、観光サービス業を中心とした第3次産業のほか、電気機械、輸送用機械（中小造船）、ゴム製品などの製造業や、恵まれた自然を活かした農業、水産業も盛んであり、特に真珠養殖発祥の地として世界的に有名である。また、志摩市では平成28年度に伊勢・志摩サミットが開催され、令和3年には「第9回太平洋・島サミット」が開催され、地域の観光事業の発展が期待されている。</p>
伊 賀	<p>伊賀市は、伊賀忍者発祥の地であり、俳聖松尾芭蕉の生誕地でも知られており、伊賀焼、伊賀組み紐等の伝統工芸品も有名である。平成29年には「忍者市宣言」を行い、忍者を活かした観光客誘客や街づくりを進めている。名阪国道により大阪・名古屋の2大都市圏を結ぶ利便性から、上野新都市開発整備事業では「上野新都市」（ゆめぼりす伊賀）として、住宅・産業・学・憩の複合機能を有した都市環境の整備が進められている。名張市は、大阪圏まで約60分の利便性からベッドタウンとして鉄道沿線に複数の大規模住宅地が開発されるとともに、周辺には関西圏と中京圏の間にある地理的利点を生かして工業団地も複数造成されている。</p>
尾 鷲	<p>尾鷲市は背後の大台ヶ原山系と黒潮おどる豪快なリアス式海岸の熊野灘を臨んだ平地の少ない地域で、全国でも有数の多雨地帯として知られている。産業は天然の良港を基盤とした水産業、尾鷲ヒノキを中心とした林業の第一次産業と、それに関連した食料品、木材製品等の加工業の外、商業、サービス業であるが、企業規模が小さく雇用需要は小さい。みえ尾鷲海洋深層水を開発や世界遺産熊野古道の魅力の情報発信拠点「熊野古道センター」の集客による地域の活性化、経済効果の波及に取り組んでいる。また、近畿自動車道紀勢線が開通し、高速道路整備による地域の発展が期待されている。</p>
熊 野	<p>熊野市は県の南部に位置し、黒潮おどる熊野灘が北部では天然の奇岩の名勝鬼が城や柱状節理の楯ヶ崎を南部では日本の渚百選にも選ばれた七里御浜を作り出しており、これと「吉野熊野国立公園」の紀伊山地に挟まれた自然美に育まれた地域である。産業の主体はみかん等の柑橘を中心とした農業、林業、水産業など恵まれた自然環境を活かした第一次産業の外、建設業、パルプ・紙・紙加工品、木材・木製品等の製造業である。平成16年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたことで、古くは伊勢神宮から熊野三山への参詣道が現在は熊野古道として整備され、これらを巡る観光を活用した地域の活性化が推進されている。</p>
	<p>“三重”の地名は古事記から。「古事記」には、父景行天皇の命を受けて東国平定に赴いた倭健命は、鈴鹿の能褒野（のぼの）で亡くなったと示されている。桑名郡尾津の浜から能褒野に向かう途中、次第に弱った倭健命は「我が足三重の勾りなして、いと疲れたり」と語り、以後その地を三重と呼んだということが「古事記」に伝えられている。「三重県」という県名は、明治5年県庁が津から三重郡四日市に移された時、県名は県庁所在地の名をとるのを原則としていたため、それまでの安濃津県から改称された。以後県庁が津に戻り、また度会県と合併後も県名は改称されず現在に至っている。</p>

### Ⅲ 人 口

#### 1 人口の推移

令和元年10月1日現在の三重県の人口は、1,779,770人で、前年（平成30年10月1日現在）と比べ10,606人（0.59%）減少した。男女別では、男が869,046人で4,178人（0.48%）減少し、女は910,724人で6,428人（0.70%）減少した。平均年齢は48.0歳で、前年に比べ0.3歳上昇した。

表1 人口の推移—三重県（平成9年～令和元年）

年 次	総 数 (人)	対前年増減数 (人)	対前年増減率 (%)	男 (人)	女 (人)	平均年齢 (歳)
平成9年	1,851,722	4,479	0.24	899,552	952,170	40.9
10	1,855,028	3,306	0.18	900,788	954,240	41.3
11	1,855,027	▲1	▲0.00	900,713	954,314	41.6
12	1,857,339	2,312	0.12	901,380	955,959	42.1
13	1,861,288	3,949	0.21	903,467	957,821	42.4
14	1,860,501	▲787	▲0.04	903,138	957,363	42.7
15	1,861,130	629	0.03	903,352	957,778	43.1
16	1,864,791	3,661	0.20	905,512	959,279	43.3
17	1,866,963	2,172	0.12	907,214	959,749	43.8
18	1,867,660	697	0.04	908,568	959,092	44.1
19	1,869,236	1,576	0.08	910,539	958,697	44.3
20	1,869,561	325	0.02	911,420	958,141	44.6
21	1,862,432	▲7,129	▲0.38	907,472	954,960	44.9
22	1,854,724	▲7,708	▲0.41	903,398	951,326	45.4
23	1,849,196	▲5,528	▲0.30	900,234	948,962	45.7
24	1,840,789	▲8,407	▲0.45	895,692	945,097	46.0
25	1,832,330	▲8,459	▲0.46	891,373	940,957	46.3
26	1,824,847	▲7,483	▲0.41	887,778	937,069	46.6
27	1,815,865	▲8,982	▲0.49	883,516	932,349	46.9
28	1,807,611	▲8,254	▲0.45	880,050	927,561	47.2
29	1,798,886	▲8,725	▲0.48	876,318	922,568	47.5
30	1,790,376	▲8,510	▲0.47	873,224	917,152	47.7
令和元年	1,779,770	▲10,606	▲0.59	869,046	910,724	48.0

資料 三重県戦略企画部統計課

(注) 人口は各年10月1日現在の人口である。

- ・平成12年、17年、22年及び27年は国勢調査確定値
- ・平成28年、29年、30年、令和元年は三重県月別人口調査による推計人口
- ・上記以外の年は国勢調査結果による補間補正人口

## 2 年齢構成

令和元年10月1日現在の三重県の人口を年齢3区分別にみると、年少人口（15歳未満）は217,362人で、総人口に占める割合は12.2%、生産年齢人口（15～64歳）は1,020,103人で割合が57.3%、高齢者人口（65歳以上）は522,588人で割合が29.4%となっている。

年齢3区分別人口の推移をみると、高齢者人口は一貫して増加しており、年少人口と生産年齢人口は減少傾向が続いている。

表2 年齢3区分別人口の推移 — 三重県（昭和20年～令和元年）

年次	総数 (人)	年少人口		生産年齢人口		高齢者人口	
		(15歳未満)	割合 (%)	(15～64歳)	割合 (%)	(65歳以上)	割合 (%)
昭和20	1,394,286	507,777	36.4	803,772	57.6	82,737	5.9
25	1,461,197	502,886	34.4	869,474	59.5	88,810	6.1
30	1,485,582	474,787	32.0	911,774	61.4	99,017	6.7
35	1,485,054	427,532	28.8	950,531	64.0	106,991	7.2
40	1,514,467	375,217	24.8	1,019,994	67.4	119,256	7.9
45	1,543,083	360,446	23.4	1,044,451	67.7	138,186	9.0
50	1,626,002	385,615	23.7	1,080,115	66.4	160,166	9.9
55	1,686,936	385,969	22.9	1,113,812	66.0	187,019	11.1
60	1,747,311	371,893	21.3	1,164,508	66.6	210,815	12.1
平成2	1,792,514	330,251	18.4	1,218,368	68.0	243,358	13.6
7	1,841,358	303,645	16.5	1,240,428	67.4	297,129	16.1
12	1,857,339	283,081	15.2	1,222,594	65.8	350,959	18.9
17	1,866,963	266,741	14.3	1,197,255	64.1	400,647	21.5
22	1,854,724	253,174	13.7	1,142,275	61.6	447,103	24.1
27	1,815,865	233,525	12.9	1,061,577	58.5	501,046	27.6
28	1,807,611	229,866	12.7	1,048,696	58.0	509,331	28.2
29	1,798,886	225,572	12.5	1,038,001	57.7	515,596	28.7
30	1,790,376	221,820	12.4	1,028,740	57.5	520,099	29.0
令和元	1,779,770	217,362	12.2	1,020,103	57.3	522,588	29.4

資料 三重県戦略企画部統計課

(注)・昭和25年～平成27年は国勢調査による。

- ・昭和20年は昭和20年人口調査（昭和20年11月1日現在）による。
- ・平成28年、29年、30年、令和元年は三重県月別人口調査による推計値（各年10月1日現在）。
- ・総数には年齢不詳を含み、年齢3区分別人口の割合は年齢不詳を含む総数を分母として算出している。

### 3 労働力人口

平成 27 年国勢調査結果によると、三重県の 15 歳以上人口 1,562,623 人のうち、就業者は 872,773 人、完全失業者は 30,961 人で、この両者を合わせた労働力人口は、903,734 人と、平成 22 年の前回調査時に比べ 4.2% (39,338 人) 減少した。また、15 歳以上人口に占める労働力人口の割合である労働力率 (※) は 59.9% となり、前回調査と比べ 1.6 ポイント低下した。

男女別に労働力率の推移をみると、男性は 70.5% で前回調査 (73.7%) を 3.2 ポイント低下し、女性は 50.2% で前回調査 (50.1%) を 0.1 ポイント上昇した。

(※) 労働力率は、15 歳以上人口から労働力状態「不詳」を除いて算出。

表 3 労働力状態別 15 歳以上人口 — 三重県  
(平成 7 年～平成 27 年)

年次別 労働力状態別	平成 7 年	平成 12 年	平成 17 年	平成 22 年	平成 27 年
総数	1,537,557	1,573,553	1,597,902	1,589,378	1,562,623
労働力人口	981,914	967,307	968,343	943,072	903,734
就業者	948,971	929,866	922,622	895,097	872,773
完全失業者	32,943	37,441	45,721	47,975	30,961
非労働力人口	554,055	598,476	605,699	591,512	603,939
男性	738,071	755,447	768,870	765,827	752,653
労働力人口	583,598	568,557	562,698	544,396	509,658
就業者	561,579	544,337	532,266	511,778	489,227
完全失業者	22,019	24,220	30,432	32,618	20,431
非労働力人口	153,712	181,399	189,924	193,810	213,022
女性	799,486	818,106	829,032	823,551	809,970
労働力人口	398,316	398,750	405,645	398,676	394,076
就業者	387,392	385,529	390,356	383,319	383,546
完全失業者	10,924	13,221	15,289	15,357	10,530
非労働力人口	400,343	417,077	415,775	397,702	390,917

資料 三重県戦略企画部統計課「国勢調査」

(注) 総数には労働力状態「不詳」を含む。



## IV 産 業

### 1 事業所数及び従業者数

平成28年経済センサス - 活動調査（以下「H28活動調査」）による平成28年6月1日現在の三重県内の事業所数は、77,402事業所で、平成24年経済センサス - 活動調査（以下「H24活動調査」）と比較すると1,648事業所（2.1%）減少している。

三重県内の従業者数は、809,368人で、H24年活動調査と比較すると13,399人（1.7%）増加している。

※ 事業内容等が不詳の事業所を除く。（以下同じ）

※ 平成24年経済センサス - 活動調査は、平成24年2月1日に実施。

表4 事業所数及び従業者数

	事業所数	従業者数	
			1事業所当たり従業者数
H24活動調査	79,050	795,969	10.1
H28活動調査	77,402	809,368	10.5
増減率（%）	▲2.1	1.7	—

資料 三重県戦略企画部統計課「平成28年経済センサス - 活動調査」

### 2 産業別事業所数及び従業者数

事業所数を産業大分類別にみると、「卸売業、小売業」が19,562事業所（全体の25.3%）と最も多く、次いで「宿泊業、飲食サービス業」が9,362事業所（12.1%）、「建設業」が7,941事業所（10.3%）、「製造業」が7,609事業所（9.8%）となり、この4産業で全体の57.5%を占めている。

一方、従業者数は「製造業」が210,052人（全体の26.0%）と最も多く、次いで「卸売業、小売業」が148,131人（18.3%）、「医療、福祉」が98,587人（12.2%）、「宿泊業、飲食サービス業」が75,224人（9.3%）、となっており、この4産業で全体の65.7%を占めている。

表5 産業別事業所数及び従業者数

	事業所数	構成比(%)	従業者数	構成比(%)
	77,402	100.0	809,368	100.0
A,B 農業、林業、漁業	682	0.9	7,325	0.9
C 鉱業、採石業、砂利採取業	48	0.1	467	0.1
D 建設業	7,941	10.3	47,125	5.8
E 製造業	7,609	9.8	210,052	26.0
F 電気・ガス・熱供給・水道業	104	0.1	3,090	0.4
G 情報通信業	462	0.6	5,087	0.6
H 運輸業、郵便業	1,933	2.5	43,861	5.4
I 卸売業、小売業	19,562	25.3	148,131	18.3
J 金融業、保険業	1,317	1.7	18,193	2.2
K 不動産業、物品賃貸業	3,818	4.9	13,928	1.7
L 学術研究、専門・技術サービス業	2,620	3.4	16,376	2.0
M 宿泊業、飲食サービス業	9,362	12.1	75,224	9.3
N 生活関連サービス業、娯楽業	6,863	8.9	37,294	4.6
O 教育、学習支援業	2,488	3.2	16,832	2.1
P 医療、福祉	5,658	7.3	98,587	12.2
Q 複合サービス業	682	0.9	8,104	1.0
R サービス業(他に分類されないもの)	6,253	8.1	59,692	7.4

資料 三重県戦略企画部統計課「平成28年経済センサス-活動調査」

## V 労働市場の概況

### 1 雇用失業情勢

県内の雇用失業情勢は、平成20年秋のリーマン・ショック以降の世界的な景気悪化の影響を受け、平成20年度後半から厳しい状況が続いたものの、平成22年度後半からは持ち直しの動きが見られ、緩やかな改善傾向が続いた。平成25年度後半から平成26年度前半にかけて、消費税増税に伴う駆け込み需要とその反動の影響がみられ、平成27年度においては、中国をはじめとする新興国経済の減速に伴い、一部の製造業などで弱めの動きとなったものの、有効求人倍率については、平成25年6月に1倍となった後、着実に上昇を続け平成29年6月には1.6倍台、平成30年2月には1.7倍台になり、令和元年9月まで29ヶ月連続で1.6倍以上となった。平成31年2月以降は米中貿易摩擦など世界経済の先行き不透明感から改善の動きは弱含んだものとなり、平成31年1月の1.75倍をピークに低下傾向となった。令和2年においては新型コロナウイルスの感染拡大により経済の下押しが急速かつ大幅に増加したことで、求人倍率の低下傾向が拡大した。

三重県の完全失業率（モデル推計値）は、平成22年10～12月期に3.7%に低下した後、低下傾向が継続し平成31年1～3月期には0.9%と過去最低の水準となった。また、令和2年平均の完全失業率は1.7%（全国2.8%）となった。

令和2年度の求人の動向は、前年度との比較で新規求人数は20.8%減、有効求人数についても23.2%減となり、共に2年連続減少した。

求人動きを前年同期比の時系列（四半期ベース）で見ると、新規求人数は、平成22年1～3月期以降、平成26年4～6月期まで18期連続で増加となった。増加幅については、平成22年度中は二桁の増加幅で推移し、平成23年4～6月期には東日本大震災の影響により2.7%増と一時的に増加幅が縮小したものの、再び増加幅が拡大し平成24年1～3月期から7～9月期まで3期連続で二桁の増加を続けた。平成24年10～12月期は8.7%増と、世界経済の減速の影響を受け増加幅は縮小し、以降3期連続で一桁の増加幅に留まった。平成25年度に入ると平成26年4月からの消費増税にむけての駆け込み需要から、平成25年7～9月期は13.4%増、10～12月期は16.1%増、平成26年1～3月期は9.1%増と堅調な動きが続いたが、消費増税前の駆け込み需要の反動減から平成26年7～9月期は2.3%減となった。その後、小幅な増加に転じたが、平成28年1～3月期に2.0%減となった後、平成30年10月～12月にかけて11期連続で増加した。平成31年1月～3月期は2.0%の減少に転じた後、平成31年4月～令和元年6月期は2.5%減、令和元年7～9月期5.7%減、令和元年10～12月期は6.7%減、令和2年1～3月期は17.5%減となった。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響も受け、令和2年4～6月期は30.3%減、令和2年7～9月期は24.5%減、令和2年10～12月期は19.9%減、令和3年1～3月期は6.9%減と減少が続いている。

有効求人数は、平成22年4～6月期以降、平成24年10～12月期11.6%増まで11期連続で二桁の増加を続け、平成25年1～3月期は7.4%増、平成25年4～6月は8.2%増と増加幅は一時的に縮小したものの、平成25年7～9月期は13.5%増、平成25年10～12月期は16.6%増、平成26年1～3月期は14.5%増となり堅調な動きが続いた。平成26年度に入ると消費増税の反

動減から増加幅が縮小し、平成26年度から平成28年度にかけて弱い動きが続いたが、平成29年度に入って持ち直し5%~8%の増加幅で推移した。平成30年7~9月期以降は増加幅が徐々に縮小し、平成31年4月~令和元年6月期に3.0%の減少に転じて以降、7~9月期は5.0%減、10~12月期は7.2%減、令和2年1~3月期は15.1%減となった。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響も受け、令和2年4~6月期は29.0%減、令和2年7~9月期は27.9%減、令和2年10~12月期は22.1%減、令和3年1~3月期は12.7%減と減少が続いている。

令和2年度の求職者の動向は、前年度との比較で、新規求職申込件数は1.2%減となり11年連続で減少したが、有効求職者数は逆に10.4%増となり、2年連続で増加した。

求職の動きを前年同期比の時系列（四半期ベース）でみると、新規求職申込件数は、平成20年秋のリーマン・ショックの影響から、新規求職者が81.4%の大幅増となった平成21年1~3月期をピークに増加幅が徐々に減少したものの平成21年10~12月期まで増加が継続した。平成22年1~3月期には前年同期比18.5%減と7期ぶりに減少に転じた後、11期連続で減少を続け、平成24年10~12月期に4.3%増と一時的に増加となったものの、再び8期連続で減少となった。平成27年1~3月期に9か月ぶりに1.2%の増加となったが、その後も労働力人口の減少や景気の回復基調等が影響し12期連続で減少した。平成30年4~6月期は0.3%増と一時的に増加に転じたものの、平成31年4月~令和元年6月期は7.6%減、7~9月期は0.4%減となり5期連続で減少し、10~12月期になると1.5%増となったが、令和2年1~3月期には再び1.2%減となった。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響も受けつつ、2年4~6月期は0.9%増、令和2年7~9月期は0.3%増、令和2年10~12月期は7.0%減、令和3年1~3月期は0.1%増となっている。

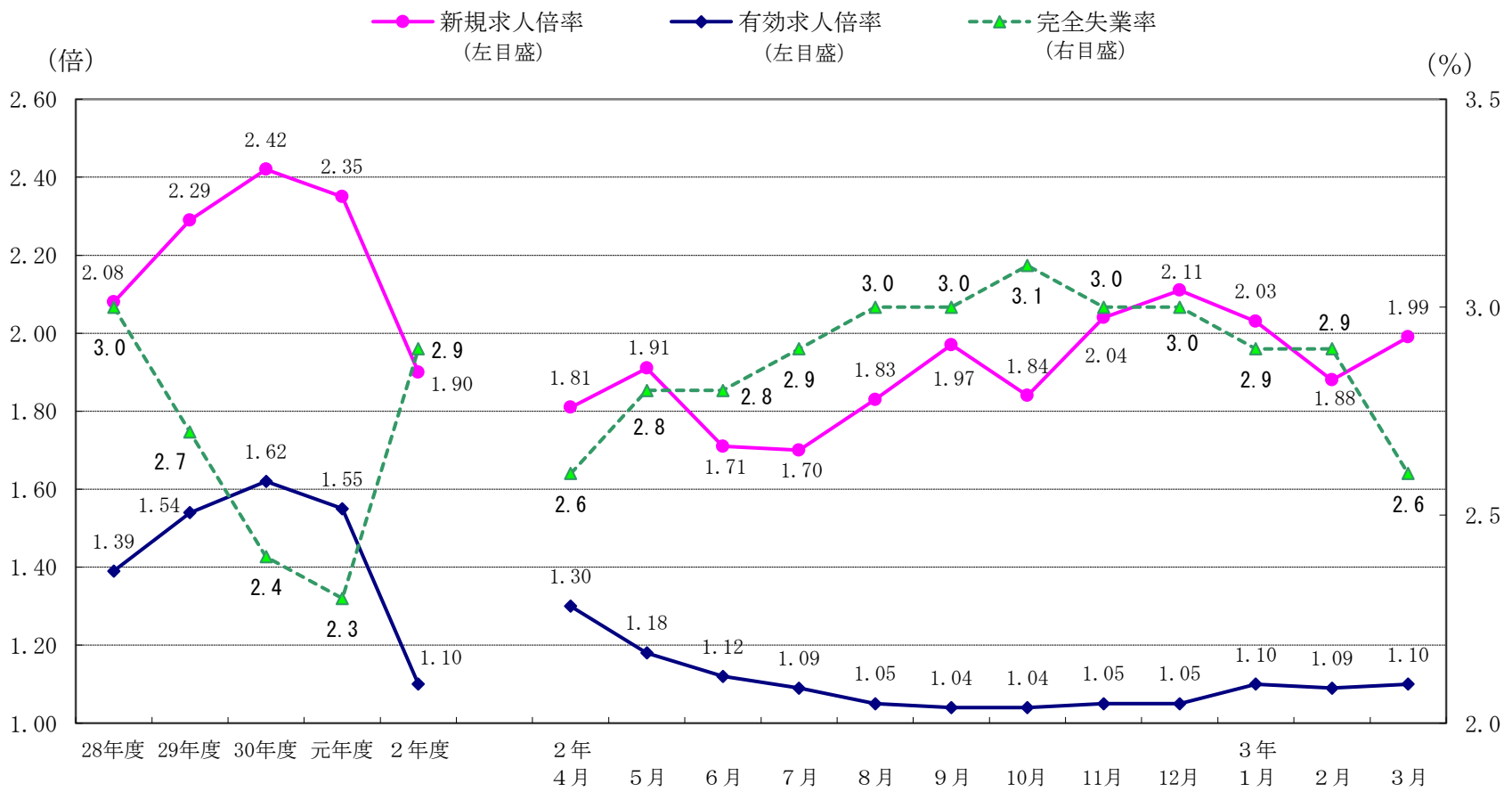
有効求職者数は、新規求職の増加を受けて平成20年10~12月期から増加に転じ、平成21年4~6月期には75.6%増と増加幅が最大となった。その後、平成22年1~3月期には0.4%の減少に転じた後、平成24年7~9月期の4.4%減まで11期連続で減少した。その後、平成24年10~12月期0.7%増、平成25年1~3月期1.7%増と2期連続での増加となったが、平成25年4~6月期1.2%減と再び減少に転じ20期連続で減少した。平成30年度に入ると1%未満の幅で増加と減少を繰り返すなど概ね横ばいで推移したが、平成31年4月~令和元年6月期は3.2%減、令和元年7~9月期は0.7%減であったが、令和元年10~12月期は2.4%増、令和2年1~3月期には5.5%増となり増加に転じた。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響に対応した個別延長給付の影響もあり、2年4~6月期は2.2%増、令和2年7~9月期は15.2%増、令和2年10~12月期は15.6%増、令和3年1~3月期は9.1%増となっている。

このような求人・求職の動きを受けて、令和2年度平均の新規求人倍率（原数値）は1.84倍となり、前年度より0.45ポイントの低下となった。また、有効求人倍率（原数値）は1.09倍となり、前年度に比べ0.48ポイントの低下となったが、8年連続で1倍を上回った。

正社員有効求人倍率は、雇用失業情勢の改善基調を受け平成30年12月には1.27倍となり、平成16年11月の統計開始以来、最高の水準となった。令和2年度計では0.82倍となり、前年度から0.30ポイント下回り、1倍を下回った状態となった。

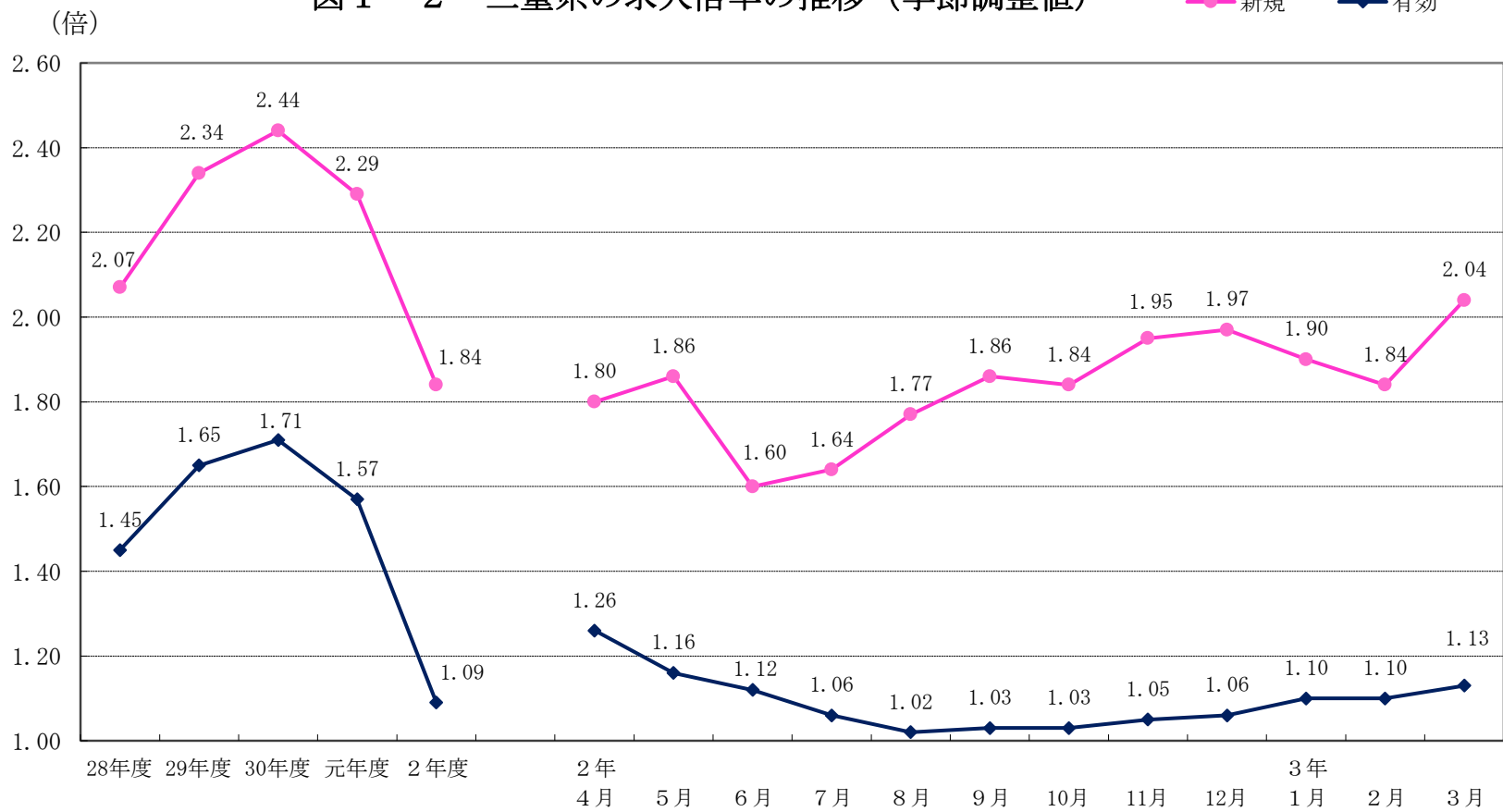
今後の雇用情勢については、新型コロナウイルス感染症が雇用に与える影響に注意する必要がある。

図1 - 1 全国の求人倍率と完全失業率の推移（季節調整値）



[注]年度の各数値については原数値。

図1 - 2 三重県の求人倍率の推移（季節調整値）



[注]年度の各数値については原数値。

表6 求人倍率の推移

(倍)

区分	三重県				全国	
	新規		有効		新規	有効
	季節調整値	原数値	季節調整値	原数値	季節調整値	季節調整値
平成28年度	—	2.07	—	1.45	2.08	1.39
平成29年度	—	2.34	—	1.65	2.29	1.54
平成30年度	—	2.44	—	1.71	2.42	1.62
令和元年度	—	2.29	—	1.57	2.35	1.55
令和2年度	—	1.84	—	1.09	1.90	1.10
令和2年4月	1.80	1.37	1.26	1.19	1.81	1.30
5月	1.86	1.66	1.16	1.06	1.91	1.18
6月	1.60	1.58	1.12	1.02	1.71	1.12
7月	1.64	1.75	1.06	1.01	1.70	1.09
8月	1.77	1.80	1.02	1.00	1.83	1.05
9月	1.86	1.88	1.03	1.01	1.97	1.04
10月	1.84	1.95	1.03	1.03	1.84	1.04
11月	1.95	2.38	1.05	1.12	2.04	1.05
12月	1.97	2.44	1.06	1.16	2.11	1.05
令和3年1月	1.90	1.99	1.10	1.18	2.03	1.10
2月	1.84	1.90	1.10	1.18	1.88	1.09
3月	2.04	1.75	1.13	1.16	1.99	1.10

\*全国の求人倍率のうち、年度については原数値。

表7 年齢別常用有効求人倍率

(倍)

区分 年月	24歳以下	25～24歳	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65歳以上	計
平成28年10月	1.40	1.42	1.33	1.18	1.19	1.26	1.30
平成29年10月	1.68	1.66	1.56	1.38	1.36	1.39	1.51
平成30年10月	1.78	1.73	1.61	1.41	1.36	1.37	1.54
令和元年10月	1.67	1.62	1.52	1.35	1.26	1.26	1.44
令和2年10月	1.13	1.11	1.05	0.93	0.80	0.67	0.94

\*求職者1人あたりの就職機会を算定し算出する「就職機会積み上げ方式」による。

## 2 求人動向

令和2年度の新規求人数は118,042人で、前年度に比べ▲20.8%（30,971人）の減少、有効求人数も334,488人で同▲23.2%（100,985人）の減少となり、前年度比で2年連続減少した。

有効求人数を四半期別に前年同期と比較すると、令和2年4月～6月期▲29.0%減、7～9月期▲27.9%減、10～12月期▲22.1%減、3年1～3月期▲12.7%減と次第に減少幅が小さく推移した。

令和2年度の新規求人を主要産業別に前年比で見ると、「建設業」（▲0.9%、112人減）、「製造業」（▲28.6%、5,618人減）、「運輸業、郵便業」（▲38.7%、4,148人減）、「卸売業、小売業」（▲24.9%、4,479人減）、「宿泊業、飲食サービス業」（▲20.2%、2,722人減）、「生活関連サービス業、娯楽業」（▲40.3%、2,515人減）、「医療、福祉」（▲15.3%、5,395人減）、「サービス業（他に分類されないもの）」（▲20.1%、3,674人減）などが減少し、増加した主要産業はなかった。

「製造業」を主な業種別にみると、「食料品」（▲15.2%、469人減）、「化学工業」（▲31.9%、297人減）、「プラスチック製品」（▲40.4%、561人減）、「金属製品」（▲36.5%、707人減）、「はん用機械器具」（▲14.4%、168人減）、「生産用機械器具」（▲31.7%、440人減）、「電子部品・デバイス・電子回路」（▲39.3%、378人減）、「電気機械器具」（▲35.2%、582人減）、「輸送用機械器具」（▲30.0%、775人減）などが減少となった。

雇用形態別では、パートを除く新規求人が67,185人で▲20.0%（16,820人）の減少、パート新規求人は50,857人で▲21.8%（14,151人）の減少となった。

一方、令和2年度の新規求人の有効求人数は149,511人で前年度比▲18.1%（33,014人）の減少であった。新規求人数全体（118,042人）に対する正社員求人（51,449人）の割合は43.6%となり、前年度に比べ2.0ポイント上昇、正社員有効求人倍率は前年度に比べ0.30ポイント下降し0.82倍となった。

図2 求人推移（学卒を除き、パートを含む。）

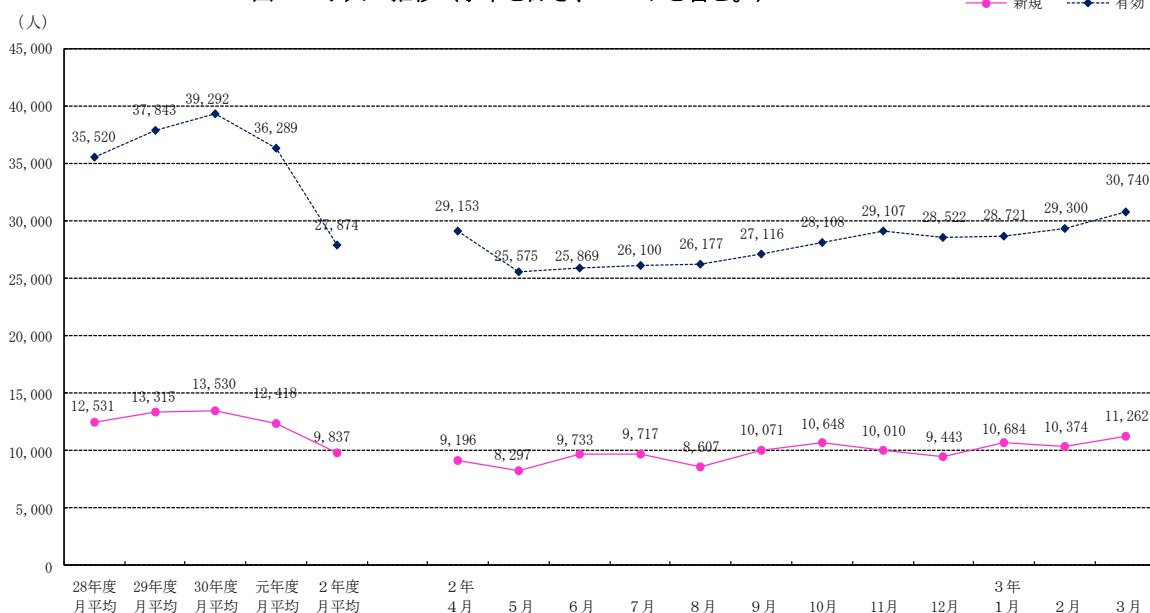


表8 新規求人の動き

(人、%)

区分 年度		全数		パートを除く		パート	
		求人数	増減率(%)	求人数	増減率(%)	求人数	増減率(%)
平成28年度		150,370	0.9	84,944	0.8	65,426	1.0
平成29年度		159,784	6.3	90,931	7.0	68,853	5.2
平成30年度		162,356	1.6	91,464	0.6	70,892	3.0
令和元年度		149,013	▲ 8.2	84,005	▲ 8.2	65,008	▲ 8.3
令和2年度		118,042	▲ 20.8	67,185	▲ 20.0	50,857	▲ 21.8
四 半 期 別	4～6月	27,226	▲ 30.3	15,287	▲ 30.6	11,939	▲ 29.9
	7～9月	28,395	▲ 24.5	16,177	▲ 23.8	12,218	▲ 25.5
	10～12月	30,101	▲ 19.9	17,333	▲ 18.1	12,768	▲ 22.3
	1～3月	32,320	▲ 6.9	18,388	▲ 6.1	13,932	▲ 8.0

表9 有効求人の動き(月平均)

(人、%)

区分 年度		全数		パートを除く		パート	
		求人数	増減率(%)	求人数	増減率(%)	求人数	増減率(%)
平成28年度		35,520	1.5	20,083	1.3	15,437	1.8
平成29年度		37,843	6.5	21,659	7.8	16,184	4.8
平成30年度		39,292	3.8	22,286	2.9	17,007	5.1
令和元年度		36,289	▲ 7.6	20,617	▲ 7.5	15,672	▲ 7.8
令和2年度		27,874	▲ 23.2	16,073	▲ 22.0	11,801	▲ 24.7
四 半 期 別	4～6月	26,866	▲ 29.0	15,247	▲ 28.8	11,619	▲ 29.3
	7～9月	26,464	▲ 27.9	15,145	▲ 27.2	11,319	▲ 28.9
	10～12月	28,579	▲ 22.1	16,666	▲ 19.9	11,913	▲ 25.0
	1～3月	29,587	▲ 12.7	17,232	▲ 11.4	12,355	▲ 14.5



図3 産業別新規求人の推移（対前年同期比・月平均比較）

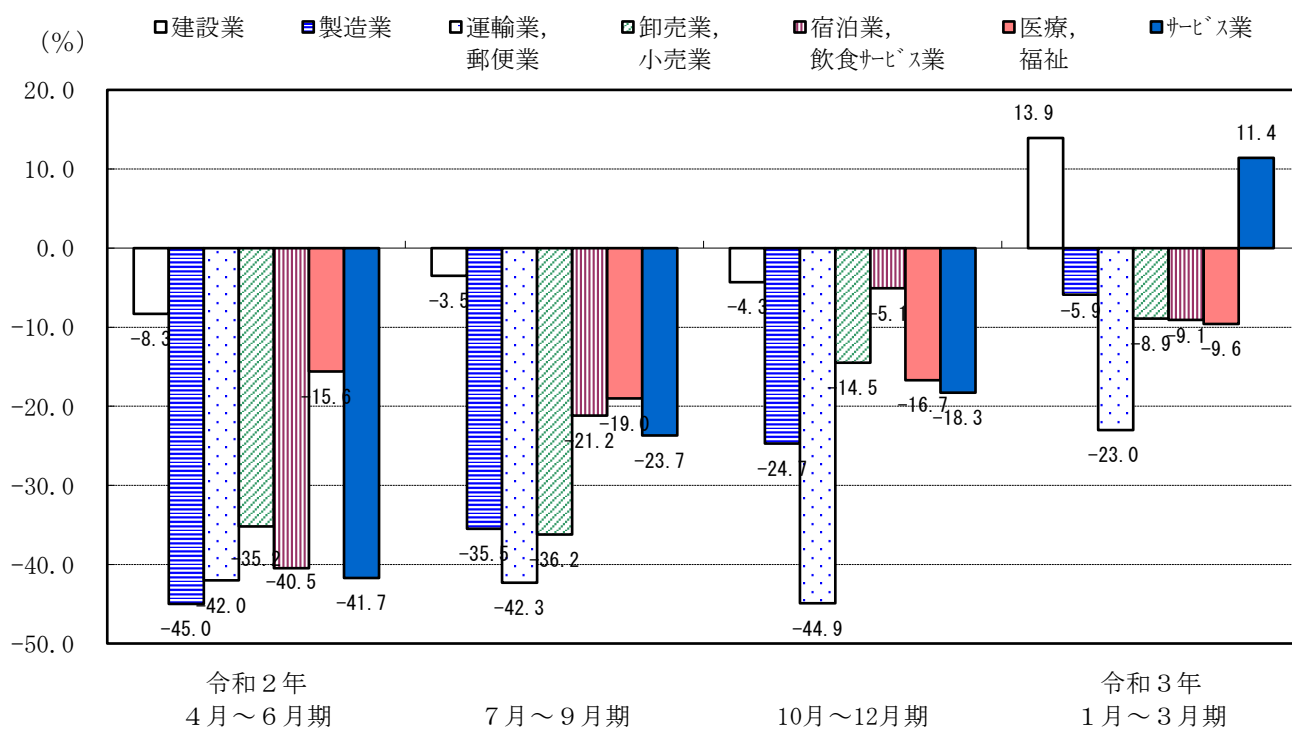
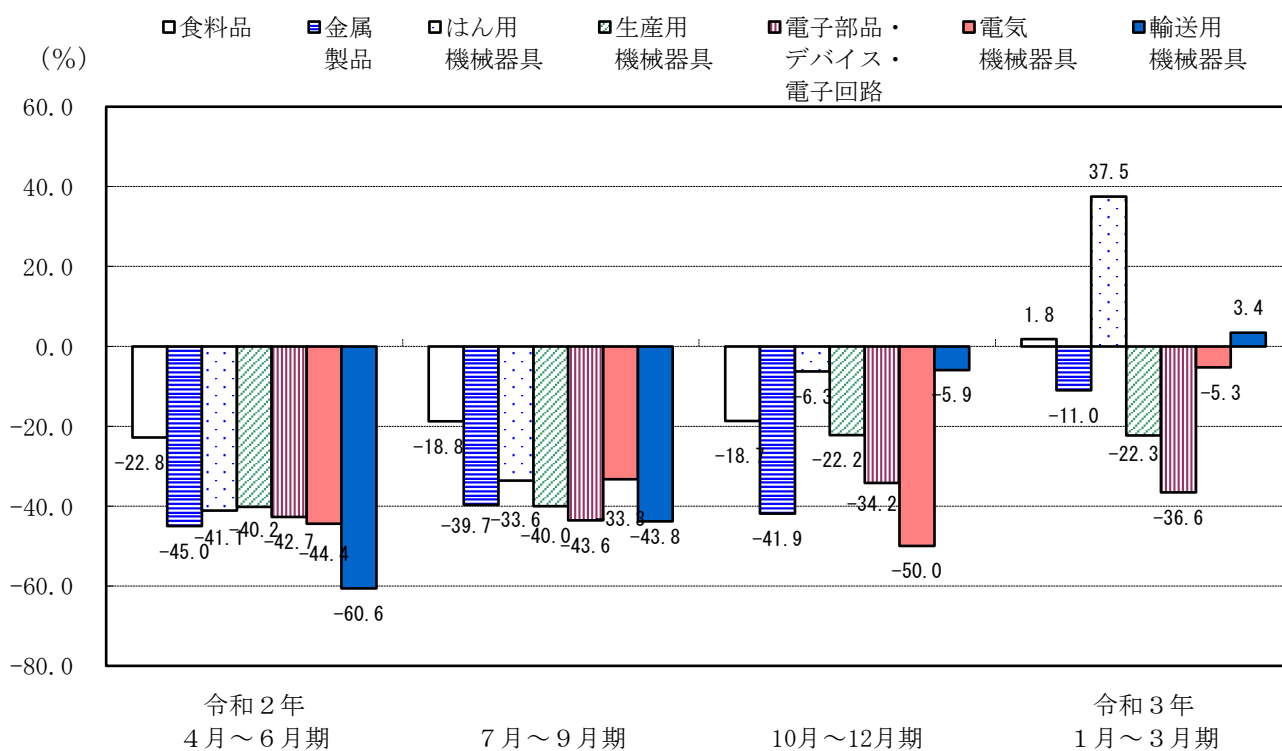


図4 製造業の業種別新規求人の推移（対前年同期比・月平均比較）



### 3 求職の動向

令和2年度の新規求職申込件数は64,308件で、前年度に比べ▲1.2%（773件）減少し、有効求職者数は306,114人で同10.4%（28,808人）の増加となった。

有効求職者を四半期別に前年同期と比較すると、令和2年4月～6月期+2.2%増、7～9月期+15.2%増、10～12月期+15.6%増、3年1～3月期+9.1%増となり、増加で推移した。

令和2年度の新規求職者を年齢区分別にみると、45歳未満の者は30,171人で▲5.8%の減少、45歳以上の者は34,137人で3.3%の増加となった。

雇用形態別では、パートを除く新規求職申込件数は39,694件で▲1.6%（650件）減少、パートの新規求職申込件数は24,614件で▲0.5%（123件）減少した。

令和2年度の新規常用求職者（パートを含む）を態様別にみると、「在職求職者」が▲8.9%の減少、「離職者」は+2.7%の増加、「無業者」は+0.5%の増加となった。「離職者」の態様別では、「定年到達者」が▲10.8%の減少、「事業主都合離職者」が+27.2%の増加、「自己都合離職者」が▲4.9%の減少となった。

図5 求職の推移（学卒を除き、パートを含む。）

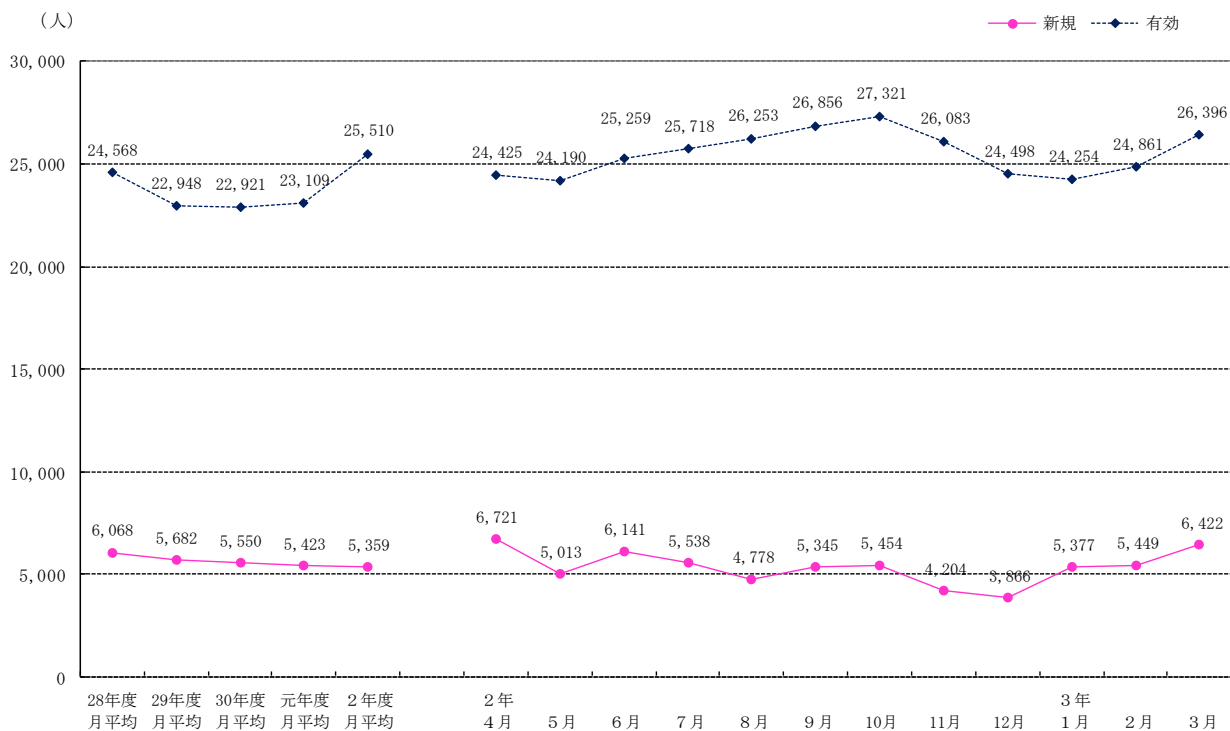


表 10 新規求職の動き

(人、%)

区分 年度		全数	男	女	パートを 除く	パート
平成28年度		72,818	33,231	39,496	47,153	25,665
平成29年度		68,179	30,460	37,616	43,037	25,142
平成30年度		66,601	30,154	36,324	41,949	24,652
令和元年度		65,081	29,516	35,459	40,344	24,737
令和2年度		64,308	29,705	34,565	39,694	24,614
対前年度増減率 2年度/元年度		▲ 1.2	0.6	▲ 2.5	▲ 1.6	▲ 0.5
四 半 期 別	4～6月	17,875	8,280	9,580	10,953	6,922
	7～9月	15,661	7,198	8,455	9,843	5,818
	10～12月	13,524	6,443	7,075	8,556	4,968
	1～3月	17,248	7,784	9,455	10,342	6,906

表 11 年齢区分別新規求職者の動き (学卒を除き、パートを含む。)

(人、%)

区 分		45歳未満			45歳以上			合 計		
		計	男	女	計	男	女	計	男	女
求職者	2年度	30,171	11,974	18,176	34,137	17,731	16,389	64,308	29,705	34,565
	元年度	32,036	12,641	19,339	33,045	16,875	16,120	65,081	29,516	35,459
2年度/元年度増減率		▲ 5.8	▲ 5.3	▲ 6.0	3.3	5.1	1.7	▲ 1.2	0.6	▲ 2.5

表 12 有効求職者の動き (月平均)

(人、%)

区分 年度		全数	男	女	パートを 除く	パート
平成28年度		24,568	11,431	13,109	15,545	9,022
平成29年度		22,948	10,382	12,538	14,039	8,909
平成30年度		22,921	10,544	12,338	13,744	9,178
令和元年度		23,109	10,811	12,263	13,691	9,418
令和2年度		25,510	12,163	13,321	15,214	10,296
対前年度増減率 2年度/元年度		10.4	12.5	8.6	11.1	9.3
四 半 期 別	4～6月	24,625	11,942	12,656	14,588	10,037
	7～9月	26,276	12,467	13,779	15,977	10,299
	10～12月	25,967	12,303	13,641	15,422	10,546
	1～3月	25,170	11,940	13,207	14,870	10,300

(注) 項目毎に小数点以下第1位を四捨五入しているため、就業形態区分計は必ずしも全数に一致しない。求職登録の際に男女別の記載を希望しない求職者に配慮し、平成16年11月から求職申込書の性別欄を登録時の必須入力項目から外したため、求職関係の数値については、当該項目の計と男女計が必ずしも一致しなくなっている。

表 13 中高年齢有効求職者の動き（パートタイムを含む。）

（人、%、ポイント）

年度	区分	総数 (月平均)	男	女	45～54歳	55～64歳	65歳以上	全有効求職者に占める割合
平成28年度		11,370	6,017	5,341	4,647	4,795	1,929	46.3
平成29年度		10,956	5,611	5,331	4,320	4,611	2,025	47.7
平成30年度		11,531	5,923	5,586	4,373	4,731	2,427	50.3
令和元年度		12,132	6,288	5,826	4,469	4,792	2,872	52.5
令和2年度		13,985	7,377	6,596	5,152	5,551	3,282	54.8
対前年度増減率 2年度／元年度		15.3	17.3	13.2	15.3	15.8	14.3	2.3
四半 期別	4～6月	13,598	7,344	6,241	4,798	5,310	3,491	55.2
	7～9月	14,146	7,447	6,684	5,347	5,694	3,104	53.8
	10～12月	14,181	7,411	6,759	5,297	5,653	3,231	54.6
	1～3月	14,014	7,307	6,698	5,165	5,546	3,303	55.7

- (注) 1 項目毎に小数点以下第1位を四捨五入しているため、区分計は必ずしも全数に一致しない。求職登録の際に男女別の記載を希望しない求職者に配慮し、平成16年11月から求職申込書の性別欄を登録時の必須入力項目から外したため、求職関係の数値については、当該項目の計と男女計が一致しない。
- 2 対前年度増減率欄のうち、全有効求職者に占める割合欄の数値は増減差（ポイント）である。

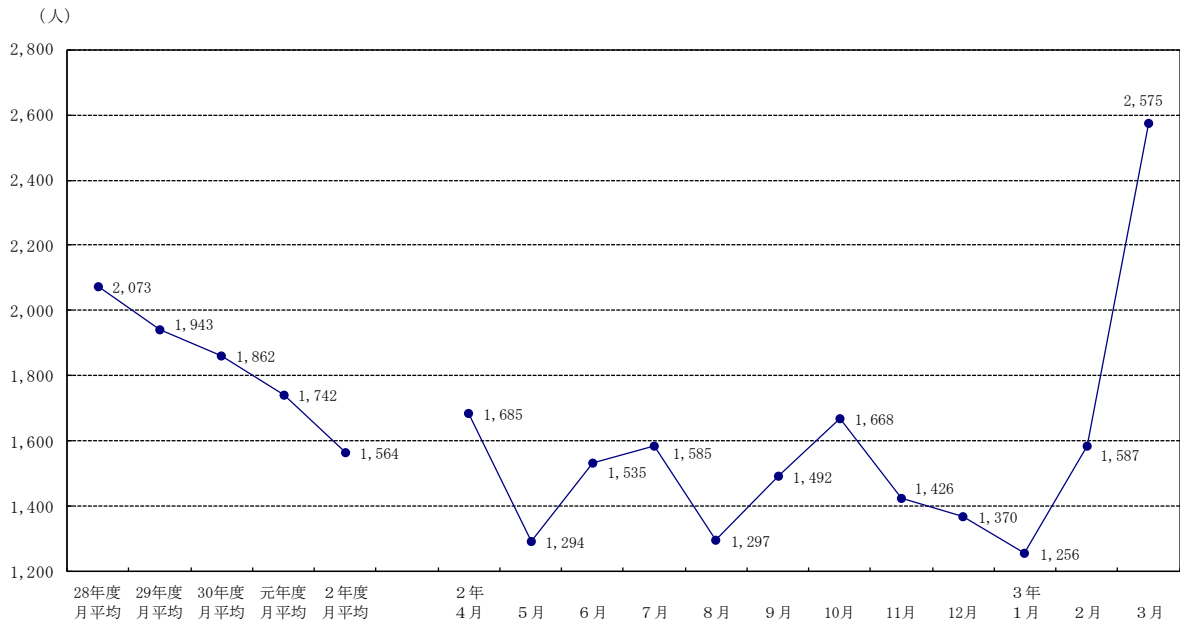
#### 4 就職の動向

令和2年度のが就職件数は18,770件で前年度に比べ▲10.2%（2,129件）減少した。雇用形態別にみると、パートを除く就職件数は9,595件で前年度比▲17.6%（2,047件）の減少、パートの就職件数は9,175件で同▲0.9%（82件）の減少となった。全就職件数に対するパートの割合は48.9%で、前年度（44.3%）に比べ4.6ポイント上回った。

年齢区分別では、45歳未満の者が8,927件で▲12.9%（1,325件）減少し、45歳以上の者は9,843件で▲7.6%（804件）減少した。

就職率（新規求職者のうち安定所の紹介で就職した者の割合）は29.2%で、前年度（32.1%）と2.9ポイント下回った。全就職件数に占める雇用保険受給者の割合は25.1%で前年度（24.2%）を0.9ポイント上回った。

図6 就職件数の推移（学卒を除き、パートを含む。）



## 5 雇用保険適用事業所と被保険者の状況

令和2年度末における雇用保険の適用事業所数は29,527事業所で前年度末（28,959事業所）と比べ2.0%（568事業所）の増加、被保険者数は505,046人で前年度末（504,529人）と比べ0.1%（517人）の増加となった。

適用事業所数を主要産業別の構成比順でみると、「建設業」が20.6%と最も高く、次いで、「製造業」14.7%、「卸売業,小売業」14.3%、「医療,福祉」12.4%、「サービス業」9.4%、「宿泊業,飲食サービス業」5.3%、「生活関連サービス業,娯楽業」4.4%、「運輸業,郵便業」4.2%、「学術研究,専門・技術サービス業」3.9%の順となっている。

製造業内の主な業種の構成比では、「金属製品製造業」14.8%、「食料品製造業」12.7%、「輸送用機械器具製造業」11.8%、「電気機械器具製造業」9.2%、「はん用機械器具製造業」6.9%の順となっている。

一方、被保険者数を主な産業別の構成比順でみると、「製造業」の割合が33.2%と最も高く、以下、「医療,福祉」15.3%、「卸売業,小売業」9.5%、「サービス業」8.7%、「運輸業,郵便業」6.9%、「建設業」6.1%と続いている。

製造業内の主な業種の構成比では、「電気機械器具製造業」20.1%、「輸送用機械器具製造業」15.5%、「化学工業」9.1%、「食料品製造業」8.8%、「電子部品・デバイス・電子回路」7.4%、「はん用機械器具製造業」7.3%の順となっている。

表14 主要産業別適用事業所数、雇用保険被保険者数

(令和3年3月末現在)

	適用事業所数	月末被保険者数
令和2年度末産業計	29,527	505,046
建設業	6,084	30,620
製造業	4,346	167,634
運輸業, 郵便業	1,232	34,959
卸売業, 小売業	4,233	47,756
金融業, 保険業	302	14,430
学術研究, 専門・技術サービス業	1,160	9,165
宿泊業, 飲食サービス業	1,574	17,883
生活関連サービス業, 娯楽業	1,306	12,400
医療, 福祉	3,654	77,391
複合サービス事業	643	9,550
サービス業	2,774	44,042
その他	2,219	39,216
令和元年度末産業計	28,959	504,529
対前年度比	2.0	0.1

図7-1 主要産業別適用事業所構成比 (%)

令和3年3月末現在

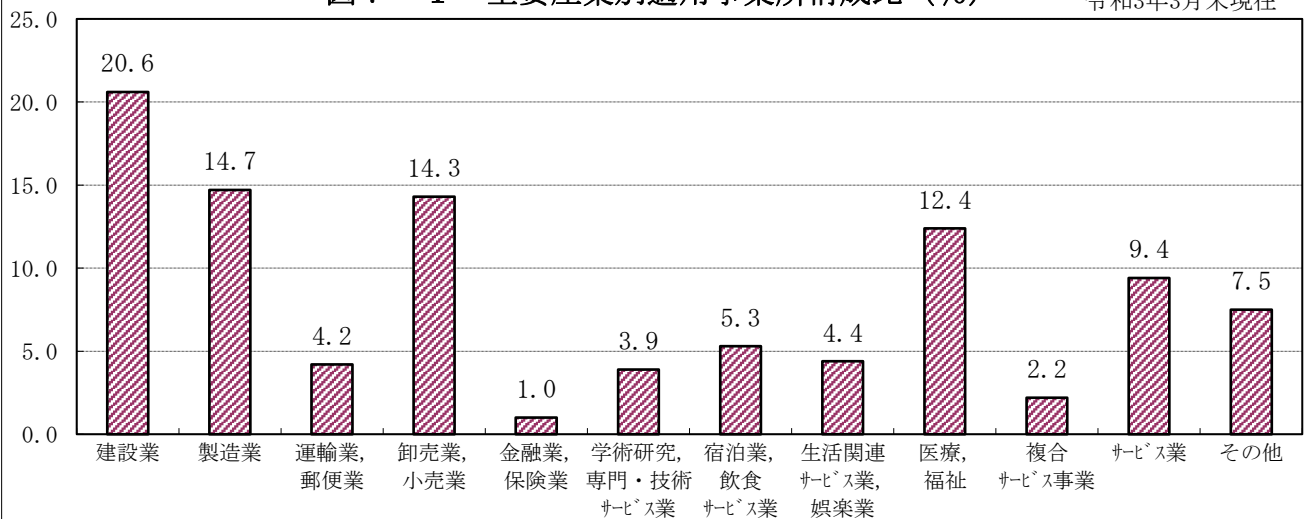
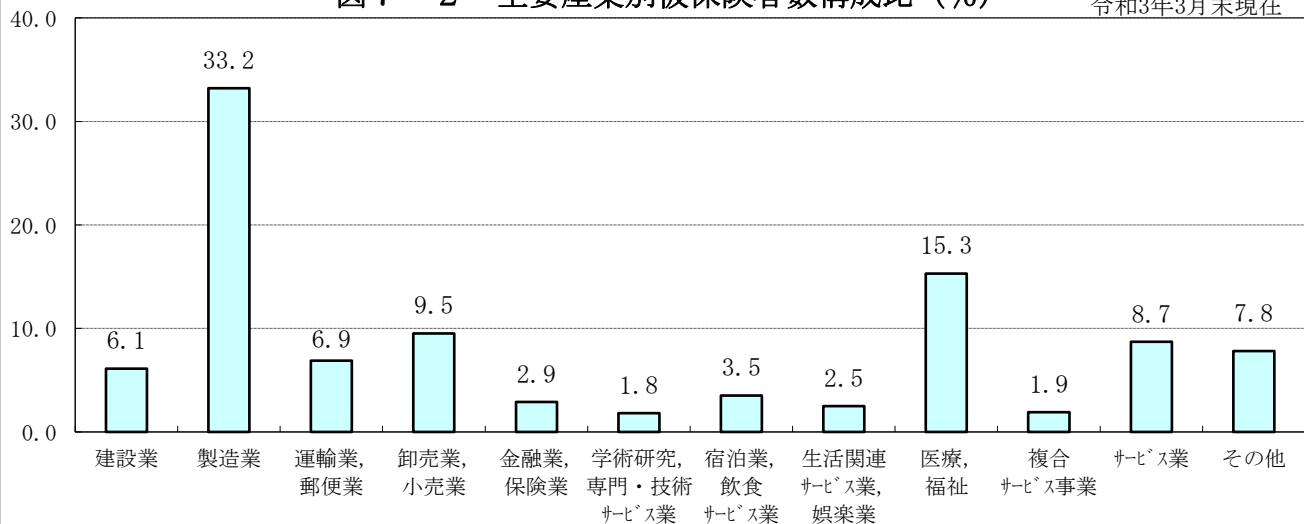


図7-2 主要産業別被保険者数構成比 (%)

令和3年3月末現在



## 6 雇用保険受給資格決定と受給者実人員の状況

令和2年度の雇用保険受給資格決定件数は21,287件で、前年度に比べ7.9%(1,563件)の増加となった。

受給資格決定件数の推移を四半期別に前年同期と比較すると、令和2年4～6月期は18.1%増、7～9月期は11.1%増、10～12月期は0.7%増、3年1～3月期は▲1.2%減となった。

また、令和2年度の雇用保険受給者実人員(月平均)は6,946人で、前年度比19.7%(1,142人)の増加となった。

雇用保険受給者実人員の推移を四半期別に前年同期と比較すると、令和2年4～6月期は9.9%増、7～9月期は28.7%増、10～12月期は25.0%増、3年1～3月期は13.9%増となった。

表15 雇用保険受給者の動き

(件、人、%)

年度	区分	受給資格 決定件数	男	女	初回受給者	受給者実人員 (月平均)
平成28年度		20,395	8,394	12,001	17,201	6,387
平成29年度		19,030	7,626	11,404	15,849	5,810
平成30年度		19,620	8,091	11,529	16,136	5,830
令和元年度		19,724	8,369	11,355	16,093	5,804
令和2年度		21,287	9,307	11,980	18,374	6,946
対前年度増減率 2年度/元年度		7.9	11.2	5.5	14.2	19.7
四 半 期 別	4～6月	6,993	2,967	4,026	5,058	6,193
	7～9月	5,201	2,241	2,960	5,422	7,956
	10～12月	4,448	2,035	2,413	3,990	7,252
	1～3月	4,645	2,064	2,581	3,904	6,381

## 7 企業整備及び雇用調整（休業・教育訓練・出向）の実施状況

県内の公共職業安定所が把握した令和2年度の企業整備状況（離職者数10人以上）は、26件1,108人で、前年度に比べ件数は▲18.8%（6件）の減少、人数では▲9.8%（120人）の減少となった。

企業整備の内訳を主な産業別にみると、「製造業」が10件と最も多く、以下、「サービス業（他に分類されない）」が4件、「卸売業、小売業」、「宿泊業、飲食サービス業」がそれぞれ3件、「運輸業、郵便業」、「不動産業、物品賃貸業」がそれぞれ2件、「医療、福祉」、「複合サービス業」がそれぞれ1件となった。

「製造業」を主な業種別にみると、「食料品製造業」が3件、「輸送用機械器具製造業」が2件、「繊維工業製造業」、「金属製品製造業」、「生産用機械器具製造業」、「電子部品・デバイス・電子回路製造業」、「電気機械器具製造業」がそれぞれ1件となった。

令和2年1月24日以降に開始した休業等であって、新型コロナウイルス感染症の影響により事業活動の縮小を余儀なくされて実施する休業等である場合は特例措置が適用されることとなった影響もあり、雇用調整助成金の支給決定件数については、前年度（139件）と比べ大幅に増加した（28,874件）。

また、雇用調整助成金の特例として、1週間の所定労働時間が20時間に満たない労働者等であって雇用保険の被保険者でない労働者を支給対象とする「緊急雇用安定助成金」が特例として創出され、8,542件の支給決定を行った。

## 8 新規学校卒業者に対する職業紹介状況

### ◎ 中学校

#### ○ 卒業者・進学者

令和3年3月卒業者は15,736人（男7,967人、女7,769人）で前年に比べ729人（男443人減、女286人減）の減少となった。

うち進学者は15,595人（男7,893人、女7,702人）で進学率は99.1%（前年98.7%）となり、前年より0.4ポイント上回った。

進学率を男女別にみると、男が99.1%（前年98.5%）、女が99.1%（前年98.9%）となり、男は前年に比べ0.6ポイント上回り、女は0.2ポイント上回った。

#### ○ 就職者

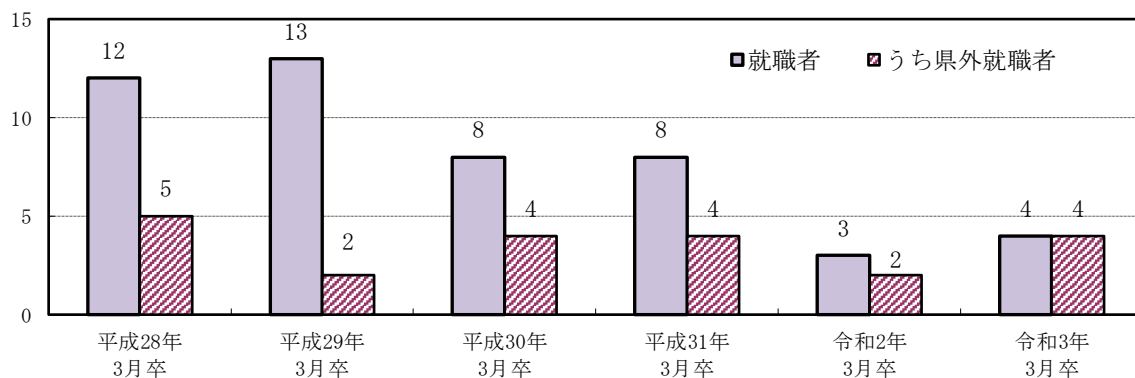
就職者は4人（男3人、女1人）で前年より1人増（男同人数、女1人増）で、卒業者のうち就職者の占める割合は0.03%と、前年に比べ0.01ポイント上回った。

就職者を送出先の地域別にみると、県内就職が0人、県外就職が4人となっている。

県外就職を都道府県別にみると、4人とも愛知県であった。



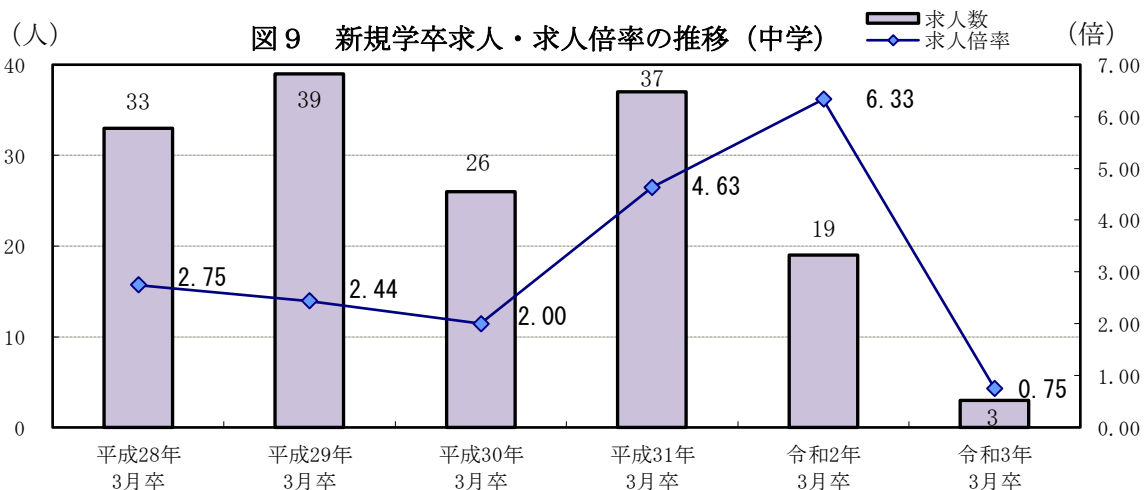
(人) 図8 新規学卒就職者の推移 (中学)



○ 求人

求人は3人で、前年に比べ84.2% (16人) の減少となった。

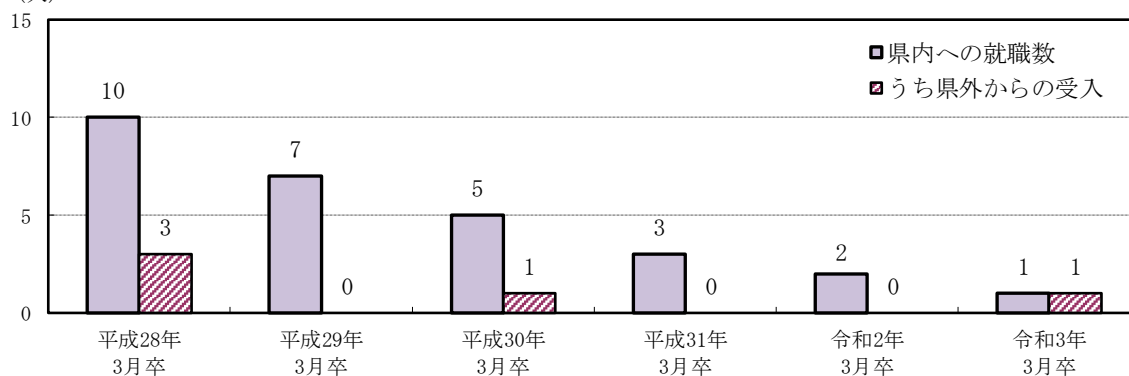
産業別に求人数をみると、全て、生活関連サービス業、娯楽業となっている。



○ 県内への就職者数 (県内就職者+県外からの受入数)

中学卒業者の県内企業への就職者は0人で前年より2人減少、県外からの受入者は1人で前年より1人増加した。

(人) 図10 新規学卒県内への就職者数の推移 (中学)



## ◎ 高等学校

### ○ 卒業生・進学者

令和3年3月の卒業生は16,360人（男8,230人、女8,130人）で前年に比べ16人（男125人減少、女141人増加）の増加となった。

うち進学者は9,482人（男4,466人、女5,016人）で進学率は58.0%となり、前年の57.6%を0.4ポイント上回った。

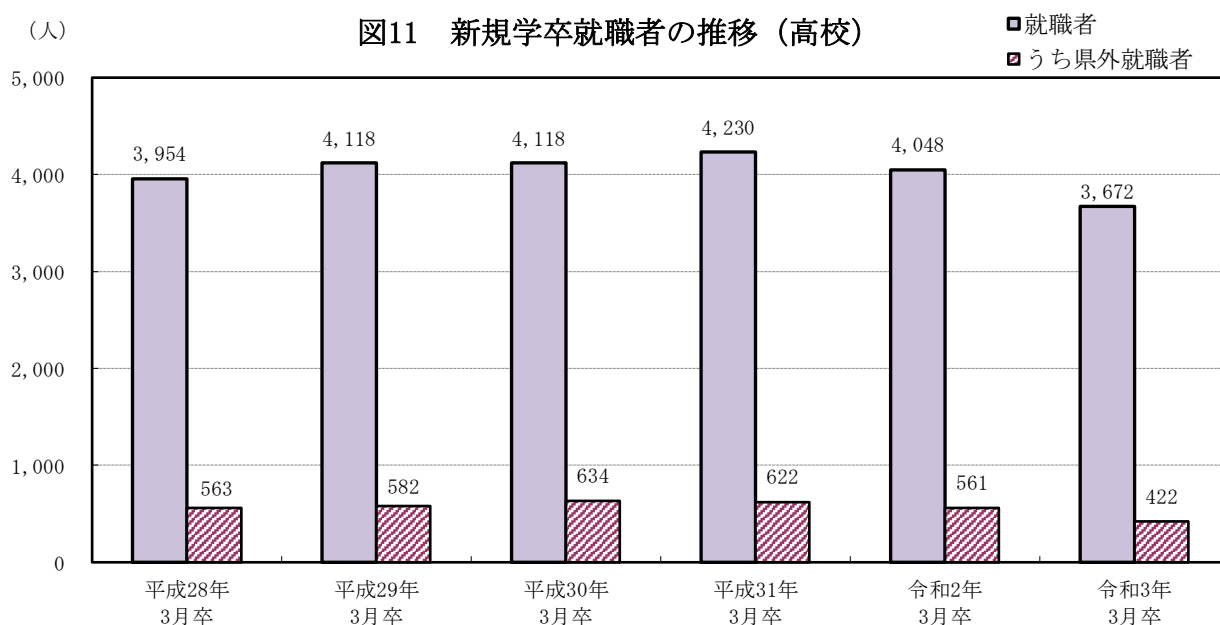
進学率を男女別にみると、男が54.3%（前年52.3%）、女が61.7%（前年63.2%）となり、男は前年を2.0ポイント上回り、女は前年を1.5ポイント下回った。

### ○ 就職者

就職者は3,672人（男2,211人、女1,461人）で前年に比べ376人（男237人減、女139人減）の減少で、卒業生のうち就職者の占める割合は22.4%と前年を2.4ポイント下回った。

就職者を送付先の地域別にみると、県内就職が3,250人、県外就職は17都府県422人となっている。

県外就職を主な都道府県別にみると、愛知県が282人と最も多く、次いで大阪府が47人、以下、滋賀県22人、東京都16人、岐阜県14人、の順となっている。



### ○ 求人

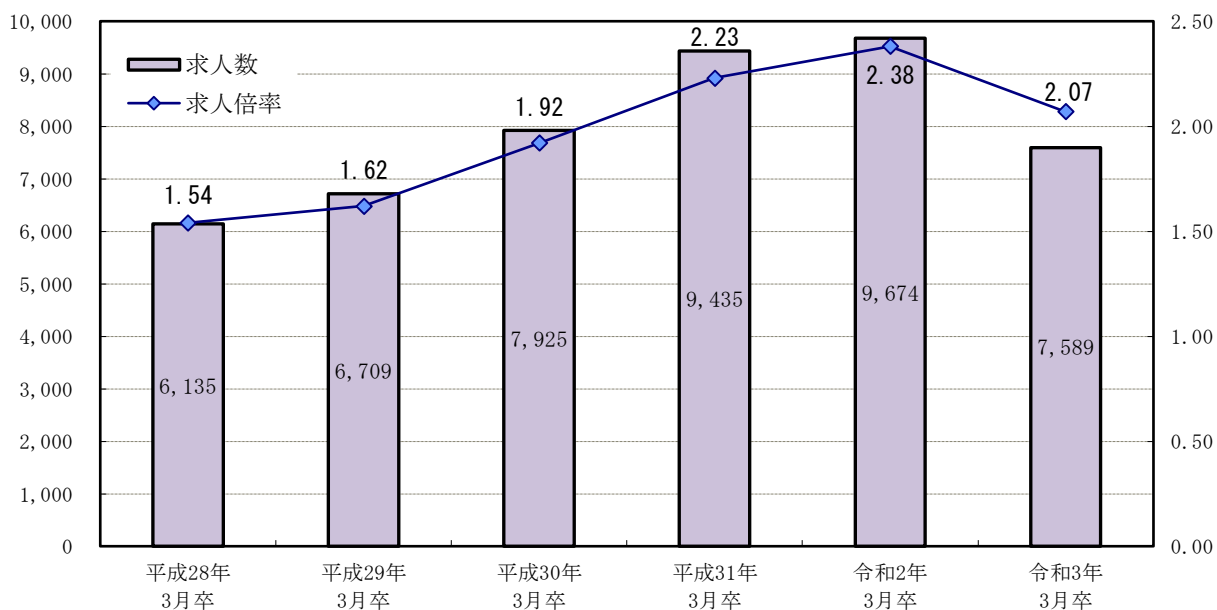
求人は7,589人で、前年に比べ21.6%（2,085人）の減少となった。

求人を産業別にみると、「製造業」2,871人（対前年度比27.3%・1,079人減）、「建設業」1,171人（同3.7%・45人減）、「医療、福祉」928人（同6.3%・62人減）、「卸売業、小売業」700人（16.6%・139人減）、「生活関連サービス、娯楽業」406人（33.7%・206人減）、「サービス業」369人（34.3%・193人減）となっている。

(人)

図12 新規学卒求人・求人倍率の推移 (高校)

(倍)



### ○ 県内への就職者数 (県内就職者+県外からの受入数)

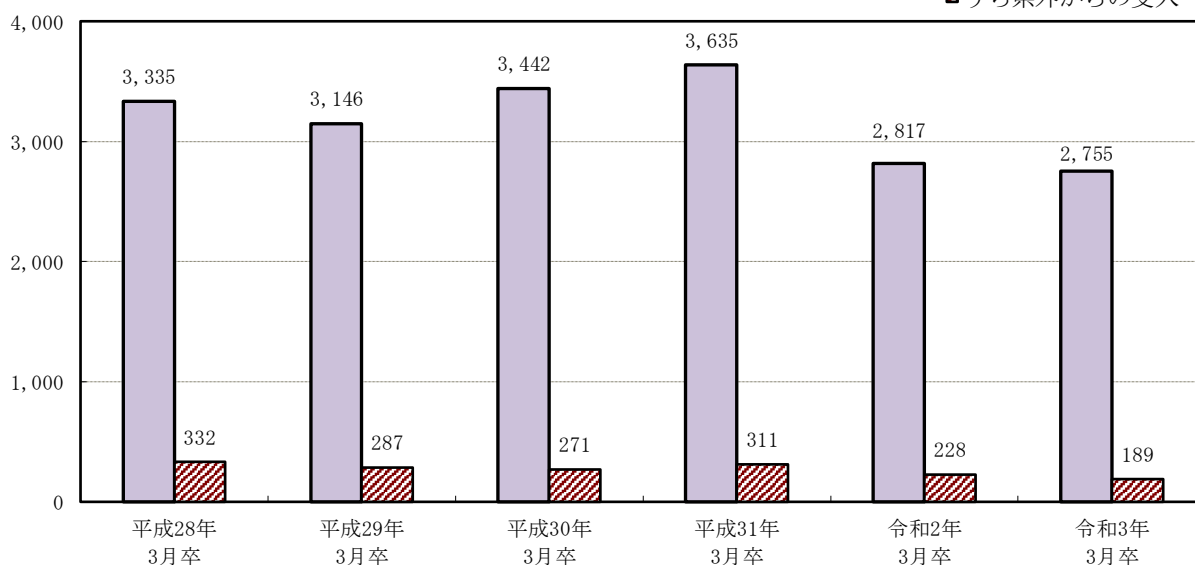
高校卒業者の県内企業への就職者数は、2,566人で前年を23人下回り、県外からの受入者は189人と前年を39人下回った。全体として2,755人が県内に就職し、前年に比べ、2.2% (62人) 減少している。

県外からの受入者の主な送元を都道府県別にみると、送出のあった30都府県のうち愛知県が42人と最も多く、以下、和歌山県23人、奈良県16人、大阪府15人、静岡県15人の順となっている。

(人)

図13 新規学卒県内への就職者数の推移 (高校)

■ 県内への就職数  
 ■ うち県外からの受入



## 9 障害者の職業紹介状況等

### ◎ 障害者の職業紹介状況

令和2年度の障害者の新規求職申込件数は3,243件で前年度に比べ2.6%（88件）減少し、就職件数は1,573件で前年度に比べ6.0%（101件）減少した。年度末現在の登録者数は17,677人で前年度に比べ5.7%（947人）の増加となった。登録区分別の内訳では、有効中の者が3,964人で前年度に比べ7.7%（283人）の増加、就業中の者は11,255人で同5.3%（568人）の増加、保留中の者は2,458人で同4.1%（96人）の増加となった。

表18 障害者の職業紹介状況 単位：件、人、%

区分 年度	職業紹介		登録				
	新規求職	就職	新規登録	総数	有効中	就業中	保留中
平成28年度	2,783	1,545	1,304	13,525	2,720	8,931	1,874
平成29年度	3,015	1,693	1,384	14,587	3,033	9,511	2,043
平成30年度	3,124	1,720	1,482	15,799	3,281	10,226	2,292
令和元年度	3,331	1,674	1,480	16,730	3,681	10,687	2,362
令和2年度	3,243	1,573	1,454	17,677	3,964	11,255	2,458
対前年度比	▲2.6	▲6.0	▲1.8	5.7	7.7	5.3	4.1

注) 登録のうち総数、有効中、就業中、保留中は各年度末現在の数値である。

### ◎ 障害者の雇用状況

平成30年4月より法定雇用率が2.0%→2.2%に改正となった。令和2年6月1日現在1人以上の障害者を雇用する義務が生じる規模45.5人以上の民間企業における障害者の雇用状況について、対象企業1,224社のうち法定雇用率2.2%を達成している企業の割合は59.0%、実雇用率は2.28%となり、前年と比べると実雇用率は0.02ポイント、達成企業割合は0.7ポイント上回った。なお、令和3年3月1日から法定雇用率2.2%→2.3%に改正された。

表19 一般の民間企業における障害者の雇用状況(各年6月1日現在) 単位：社、人、%

区分 年度	企業数	①法定雇用 障害者数の 算定の基礎 となる 労働者数	障害者の数					⑥合計 ②×2+③+ (④-⑤)×0.5 +⑤	実雇用率 (⑥/①)	雇用率 達成 企業の 割合
			②重度 障害者	③重 度 障 害 者 以 外 の 障 害 者	④短時間 労働者	⑤④の うち注3 に該当 する者				
令和元年度	1,221	196,375.0	868.0	2,205.0	786.0	210.0	4,439.0	2.26	58.3	
令和2年度	1,224	200,269.5	870.0	2,223.0	963.0	254.0	4,571.5	2.28	59.0	

注1) ①欄の「法定雇用障害者数の算定の基礎となる労働者数」とは、常用労働者総数から除外率相当数を除いた法定雇用障害者数の算定の基礎となる労働者数である。

注2) 障害者の数とは、身体障害者と知的障害者と精神障害者の計である。②欄の重度障害者（重度身体障害者及び重度知的障害者）については、ダブルカウントしている。③欄の「重度障害者以外の障害者」には、重度障害者である短時間労働者の数が含まれている。④欄の「短時間労働者」には身体・知的・精神障害者である短時間労働者1人の数を0.5としてカウントしている。

注3) 精神障害者である短時間労働者であって、平成29年6月2日以降に雇い入れられた者、平成29年6月2日より前に雇い入れられた者で同日以降に精神障害者保健福祉手帳を取得した者のいずれかに該当する者は、1人とカウントしている。

## VI 県内主要労働経済指標

区分	鉱工業		景気動向指数 (DI)		企業倒産	
	生産指数 (TCI)	生産者製品在庫指数 (TCI)	先行指数	一致指数	件数	金額 (百万円)
平成29年	107.3	85.9	—	—	100	15,852
30年	111.1	88.1	—	—	67	13,582
令和元年	106.6	90.9	—	—	68	12,137
2年	100.0	101.4	—	—	66	14,125
令和2年4月	98.3	103.9	28.6	0.0	7	835
5月	89.5	101.3	28.6	0.0	3	442
6月	93.9	100.2	42.9	14.3	4	5,294
7月	94.4	97.4	71.4	14.3	3	525
8月	102.7	99.7	71.4	85.7	4	490
9月	101.7	100.2	85.7	71.4	4	128
10月	101.5	100.9	100.0	85.7	7	471
11月	101.9	106.9	71.4	42.9	4	1,040
12月	103.8	110.6	78.6	85.7	6	1,832
令和3年1月	105.8	107.5	42.9	85.7	6	665
2月	106.4	99.5	57.1	85.7	4	230
3月	106.9	98.4	57.1	85.7	5	688
資料出所	県統計課				東京商工リサーチ津支店	

区分	消費者物価指数 (津市)	実質賃金指数	常用雇用指数	所定外労働時間指数	新設住宅着工戸数	有効求人倍率 (TCI)
平成29年	100.0	100.0	100.7	105.6	10,347	1.60
30年	101.2	98.2	101.7	100.1	10,616	1.71
令和元年	101.4	100.2	101.8	98.4	10,162	1.66
2年	101.3	・	102.6	85.0	9,558	1.16
令和2年4月	101.5	83.4	102.7	82.0	693	1.26
5月	101.3	82.6	101.7	67.2	669	1.16
6月	101.3	129.0	102.6	72.1	718	1.12
7月	101.4	117.9	102.6	76.2	839	1.06
8月	101.4	83.9	103.1	77.0	618	1.02
9月	101.4	81.6	102.9	83.6	818	1.03
10月	101.2	83.8	102.6	88.5	1,210	1.03
11月	100.9	91.5	102.7	95.9	756	1.05
12月	100.6	166.4	103.5	94.3	798	1.06
令和3年1月	101.1	84.0	102.9	84.4	815	1.10
2月	101.0	83.0	102.9	90.2	757	1.10
3月	101.2	86.7	102.7	94.3	817	1.13
資料出所	県統計課				県住宅課	三重労働局

\* 鉱工業生産指数・鉱工業生産者製品在庫指数；平成27年=100 \* TCI；季節調整値

\* 常用雇用指数・実質賃金指数・所定外労働時間；事業所規模5人以上、指数は平成27年=100

\* 消費者物価指数；平成27年=100

\* 基本的に、各月毎に公表されている数値を掲載している。